



Title	『未完のムクドリ』を探して：多世代多様な場をめぐる対話の記録
Author(s)	柴川, 明子; 小林, 真弓; 宮崎, 隆志 他
Citation	子ども発達臨床研究, 10, 19-49
Issue Date	2017-03-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.10.19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65054
Type	departmental bulletin paper
File Information	060_1882-1707_10.pdf



座談会

『未完のムクドリ』を探して

—— 多世代多様な場をめぐる対話の記録 ——



(写真：左から川田、柴川、小林、宮崎)

【座談会メンバー】

柴川明子（むくどりホーム・ふれあいの会 会長）

小林真弓（ねっこぼっこのいえ 代表）

宮崎隆志（北海道大学大学院教育学研究院）

川田 学（北海道大学大学院教育学研究院） 司会

【編集協力・写真撮影】

竹森未知（北海道大学大学院教育学院 博士後期課程）

1. 座談会にいたるまで

むくどりホームの検証

川田：最初にこの座談会にいたる経緯をお話しておきたいと思います。二つの展開がありました。一つは、むくどりホーム側からむくどりホームの「検証」を共同で行ってほしいとのお申し出があったこと。もう一つは、このセンターで数年間取り組んできた「発達支援学」というプロジェクトの展開です。

2014年の秋に、スタッフの藤井さん¹と柴川さんから、20周年の節目を迎えるむくどりホームの検証作業をしたいので協力してもらえないかとお話がありました。私は、主に幼稚園や保育所の実践者との連携が長いんですけど、私としても実践者との共同研究や実践研究とは何か、どのように進めたらよいかという問いを10年くらい持っているところでした。むくどりの検証に携わることによって、自分自身も実践者と研究者との共同についての考えを深めることができるだろうという期待を持って、快諾させていただきました。

そこで、まずむくどりの検証という企画がどういう動機で始まったのかということについて、柴川さんにおうかがいしてもよろしいでしょうか。

柴川：そうですね。まず、言い出したのは藤井さんなんです。「(川田)先生にお願いしに行くんだから柴川さん一緒に行こう」という感じの誘いだったんですよ。私も漠然と、とにかくむくどりは検証してもらいたい、自分たちだけでなく外部の人から見たむくどり検証っていうのがあったらいいなあ、という思いはあったんですけど、具体的なイメージは全然できていなくて。20周年に向けてやらなきゃならないっていう思いはずっとありましたけども。だから引っ張られて来たっていう感じなんですけどね。でも、本当にそれをしていただいたおかげで、今回こういう風な

形でいろんな方に関わっていただけたので、よかったなあと思ってますね。

川田：やっぱり20周年の節目というのが、検証をされたいという思いと深く関わっていたのですか？

柴川：そうですね、20年を目標にしてきたわけではないんですけども、やっぱり一つの区切りとしてここで一度立ち止まって検証して、21年目からのことを考えなきゃならない、という意味がありましたね。そういう意味では本当に、偶然って言ったら偶然ですけども、この20年の節目っていうのはすごく意味のあるものになっていて。こうして検証していただくことで、内部的なこともすごく大事なことだし、それから建物についても、とっても悩んでいたんですね。安全なものをみなさんに提供しなきゃならない。築46年が経っているのに、この後どう維持していくかっていうのは非常に大きな問題で。もうある時期は、これは私の最後の仕事だ、有り金全部たたき出して、壊して、新しいものを、今のよりちょっと小さ目になったとしてもいいから、安全なものを提供して次につなげようかと思ってきたんですね。人については、結構スタッフの人がしっかり、今のむくどりを維持してくださっているんで、ソフトの面ではありがたいんだけど、ハードの面は私のやるべき一つの大事なことかなと思っていました。そしてその後すぐいろんな経過があって、建て直すというのはやめたほうがいいんじゃないか、という話が出て、やめることにして。さあどうしようどうしようって言うたら、南区の区長さんが、こういう助成金の制度があるよ、ということを教えてくださって。それで設計士さんと大工さんに相談したら一つ希望が出てきて。これだけ手を加え手を加えてきたのに、壊してしまうのはもったいないし、非常に迷っていたところだったんですけど。改修するという線の方針が決まって、もしその計画がうまく通れば、再来年の3月に改修したものが完成します。なので、とってもいいタイミングで、言っていたいたなあと思ってます。

¹ 藤井奈津子さん。元むくどりホーム・ふれあいの会常勤スタッフ。

川田：こういう活動には、建物は非常に大きいですよね。建物も含めて、柴川さんから次に継承していくってようなタイミングで、検証というものが必要だったということだったのかなと、今うかがっていて思ったのですが……。

柴川：そうですね、そう思います。

川田：ありがとうございます。建物って、ただの建物ではなくて、こう、なんていうんですかね、建物とのやり取りをして、実践っていうのはつくられるってことなんですね。

柴川：そうですね。建物は、物質ではなくて。私も一人でむくどりに行ったりすると、なんだか迎え入れてもらってるという感じがあって。むくどりに、むくどりの建物に迎え入れてもらってるって感じがあるんですよね。それを思うと、やっぱりこの雰囲気壊さないで、しかも長続きさせる方法があるんだろうかって、ずいぶん迷ったんですけどね、それがあんな感じになったので、ようやく。

小林：むくどりの参加者さんに聞いたことがあるんですけど、いつも来てる常連のお母さんが、朝早く一番にむくどりに来たんですって。ストーブがついていて、シーンとしてるんだけど、むくどりの建物、建物だけでも、その柱とか床とか、そういう一つ一つに、今まで20年の、子どもたちの声とか、笑い声とか、みんなの思いや、そういうのが染みついているみたいに感じて感動したって、言ってた人がいましたね。

発達支援学

川田：もう一つの流れは、私たち研究者側の問いとして展開してきました。このセンター²では、

2011年度から3年間、「発達支援学創生研究」というプロジェクトを行ってきました。このプロジェクトの目的は、宮崎先生の言葉を借りると以下のようになります。

「近代以後に築かれた大量生産・大量消費型の社会や暮らしの見直しが必至となる下で、教育は新たな社会を創造する市民を形成する鍵を握っています。しかし、教育実践の現場に目をやると、子ども・親のみならず支援者どうしてもコミュニケーションをとることが難しくなり、発達支援にあたる人々の間では様々な戸惑いや苦悩、さらには孤立感・消耗感が広がっています。(中略)新たな時代を切り拓く市民が育つことへの期待が高まりながらも、『人が育つ』ことそのものの難しさが明らかになったのが現在でしょう。(中略)子ども発達臨床研究センターでは、改めて『人が育つ』こと、そしてそれを支援することを問い返し、発達の可能性が抑制されることがないという意味で持続可能な発達の論理と、今の社会に求められる『人が育つ場』を構築する展望を探究していくことにしました」³

こうした問題意識に基づいて、総合研究企画シンポジウムとして、2011年11月に「遊ぶ・学ぶ・働く：持続可能な発達の支援のために」、2012年11月に「『生きづらさ』を超えて」⁴を開催し、道内外の多領域の研究者と実践者にご登壇いただき、多くの参加者を得ました。また、教育、福祉、医

る。子ども発達支援研究部門、子ども臨床研究部門、教職高度化研究部門の3部門から構成。

³ 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター編(2012)遊ぶ・学ぶ・働く：持続可能な発達の支援のために(シンポジウム報告書)のp.3「はじめに」より。(北海道大学学術成果コレクション HUSCAP にてダウンロードできる。<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/49383>)

⁴ 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター編(2013)「生きづらさ」を超えて(シンポジウム報告書)(北海道大学学術成果コレクション HUSCAP にてダウンロードできる。<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/52431>)

² 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター。1978年に北海道大学教育学部附属乳幼児発達臨床センターとして設立され、2006年に現センターとな

療等の様々な領域で対人援助の仕事をされている実践者に集まっていたいただき、「(支援者) 困りごとワークショップ」を重ねるなどして、「人の育ち」の困難さを生み出す構造を明らかにしようとしてきました。その中で、改めて「発達とは」「支援とは」という問いが持ち上がり、2014年3月に「Development 概念の転換：支援の背後にある困難性を探究する」という公開シンポジウムを開催して、プロジェクトに参加してきたメンバーのそれぞれの専門の見地から、development (発達・発展・開発) 概念の再検討を行う場を持ちました⁵。

こうした私たち研究者の取り組みと、むくどりの検証作業というものには、何か共通した問題意識があると感じてきました。そのあたり、宮崎先生いかがでしょうか。

宮崎：なかなか難しいんですけど、むくどりで人が変わっていきますよね、いろんな人が。その変わり方が、学校で人が変わるという場合と少し違う気がするんです。あるいは、社会運動を通して人が変わるということもありますよね。政治的な問題などを意識し、世の中のあり方を問い直して、自分自身のあり方や生き方を問い直す、そういう変わり方もあります。それとはまた違った人の変化の仕方がそこにあるだろうと思っています。それを捉えるための枠組みを、もう一度私たちの方で考え直さないといけない。人の変化、発達って言うてもいいし成長と言ってもいいんですけども、そういったものを捉える従来の枠組みをむくどりに当てはめちゃうと、木を見て森を見ずとか、ある面からわかったような気はするかもしれませんが、それはむくどりの全体を捉えたことにならない。そうすると、むくどりの中で起きている現象の全体を捉えるための枠組

みをどうつくるのかということが、研究する側の課題になると思っています。その枠組みなるものを、仮の名前なんですけど、「発達支援学」ということで考えています。

ただ、発達や支援という言葉が両方とも手垢にまみれた言葉なので、そういう言葉の組み合わせで今言ったような、茫漠とした全体としての対象をうまく把握できるのかどうかかわからないのですが、他に言葉が見当たらないので、今はそんな風に考えています。

川田：ありがとうございます。それで、少し手前の話をする、その手垢にまみれた「発達」というものについて、発達心理学者である私なりに捉え直そうと考えてきたのが「異年齢発達カップリング」という人間の見方(アプローチ)なんです。ざっくり言うと、個人の能力や特性を同年齢集団の平均からの差で測るという従来の発達心理学の方法、これが人間の一つの見方になっているわけですが、そうではなくて、ある年齢期(例：幼児期)と別の年齢期(例：思春期)が関わり合うことによって生まれる出来事に注目してみようというアイデアです。同じ子どもでも、関わる相手が変われば、特にここでは年齢期が違えば、発揮される能力も異なり得るし、見せる感情表現やしぐさも変わってくるというのは自然です。でも、発達心理学は、学校教育の発展と深く結びついてきたこともあって、実際には同年齢集団の中でだけ子どもを観察したり、比較したりしてきたので、ある子どもの多層的・多層的な存在の仕方にあまり目を向けられなかったと思うんです。そこに光を当てたいと考えたとき、むくどりホームのような多世代多様な場づくりの実践からの示唆は大きいと思います。こうした研究の場と実践の場で生まれる互いの問いが響きあって、座談会に結びついたというわけです。

⁵ その成果は、以下の紀要として発行されている。

「Development 概念の転換：支援の背後にある困難性を探究する」『子ども発達臨床研究』第6号(特別号)、2014年12月発行。北海道大学学術成果コレクション HUS-CAP から全論文を閲覧可能。

紀要のタイトルについて

川田：経緯説明の最後に、紀要のタイトルについてもふれさせてください。『未完のムクドリ』と、

片仮名のくだけた感じにしました。最初はもっと固いタイトルで考えてたんですけど、スタッフの方々から話を聞けば聞くほど、むくどりホームの実践って“未完感”があるんですよ。未完感があるっていうのは悪い意味ではなくて、すごく悩みながら進めていることがよくわかるというか。その未完の状態を維持し続けるというのがすごく大変なことだし、そのこと自体が、とても意味があるんじゃないかと思って、未完というのを敢えてつけてみたんですね。

それで、「ムクドリ」を片仮名にしているのは、今のリアルにあるあのむくどりホームを平仮名の「むくどり」としたときに、対して片仮名の「ムクドリ」というのはそれをもっと一般化したものということで。この世の中にあるムクドリ的なものって一体何だろうというのを、少し理論化するという意味合いを持たせて片仮名で「ムクドリ」としてみました。これからみなさんとの対話を通して、片仮名の「ムクドリ」を生み出すいろんな条件について、思考を整理していければと思います。

2. むくどりおばあちゃんの「疲れ」

「この先、どうしよう」

川田：まず、柴川さんが書かれた「むくどりおばあちゃんの 夢を追い続けて」⁶から入りたいと思います。この本の馴れ初めとはどのようなものだったのでしょうか。

柴川：馴れ初めですね。私はむくどりホームを始めて11年目のときに、疲れを感じてというか、どうしても一休みさせてもらいたいという思いがあって、1年間の休暇をもらってカナダに行きました。

川田：その「疲れ」というのは、具体的にはどういうものだったのでしょうか。



柴川：この先どうしよう、という疲れですね。その前から、地域子育て支援拠点事業というものは知っていたし、道庁の方からもお話しやら資料提供してもらったりしていたので、これに適用されたらいいねっていう思いはあったけれども、なかなかそれは無理そうだなと。それじゃあ、ボランティアとしてもっと人を集めてやるのがいいのか。スタッフもボランティアとして関わってくださってる方はいるけれども、絶対安定というわけではないし、この先どうしたらいいだろう、という、悩みですね。それで、それじゃあもう後2、3年したら私はやめますって言ってやめるんなら、その2、3年は頑張れると。だけれどもそうじゃなくて、もっとその先も続けたい、というか、続けてほしい、という声が強かったので、これは続けなくてはならない。続けるためには、それじゃあ、やめるんじゃなくて、休むっていう方法があるんだなと思ったんですね。それで、1年間閉鎖しちゃうつもりだったんです、最初は。場所を閉鎖しちゃって、1年経ったらまたやりますよ、再開しますよっていうはずだったんですけども。副代表の前田さん⁷がそのときに、こういう活動は小さい灯であっても続けることが大事なんです

⁶ 柴川明子（2014）むくどりおばあちゃんの 夢を追い続けて：カナダも 英語も むくどりホームも。札幌：かりん舎

⁷ 前田典子さん。現むくどりホーム・ふれあいの会副会長。

よってというようなことで、大変な部分を引き受けてくださった。それも本当に、前田さんがそう言うことを予測して休むって言ったわけじゃなくて、もう完全に休んで、その間はみんな休んでねって言うつもりで、休むつもりだったんですけども、前田さんはそう言うてくださって。そうしたら「むくどーら」だったか、「むくどらー」だったか、ボランティアのお母さんたちが一生懸命、守ってくれたっていうことがあって。その1年間をやめることなく続けられたという……。

宮崎：「この先どうしよう」というのは、今のお話ですと、運営の問題のようにも聞こえますが、どこに向かっていくのかという方向性の問題、あるいは目的でしょうか、そんな問題もあるような気がするんですけど、両方あったということですか？

柴川：やっぱり運営の面が一番大きかった。障害のある人もない人もみんなで友達になりましょうっていう、そういう大きい目標はそのままだけども、これを続けていくために、日々の運営の仕方をどうやっていけるのかなあと思って。

むくどりホームをどう継承するか

宮崎：運営の仕方というのは、ある意味で抽象的な目標はあるんだけどそれをどう具体化したらいのかという意味での運営ですか？それとも実際に人をどう組織するか、スタッフをどう確保するかという技術的な問題でしょうか。

柴川：後者の方ですね。技術的な問題。

宮崎：あそこ確かに、私はあまり頻繁には行ってなかったのですが、前田さんたちと話をしていました。どんな風に形をつくっていくのか、つまりシステムとまでいかないけれども、ある意味で自然発生的に広がってきたものを、自然発生に任すわけにいかなくて、体制をつくっていかなくちゃいけない。そうすると誰がどんな風に担うのかと

いう問題、あるいは継承の問題も含めて、出てきてた時期だったという気がするんですけど、そういう理解でいいでしょうか？

柴川：そうですね、そう、思います。

宮崎：そこもね、面白いとこだと思うんです。さっき学校でも社会運動でもなくてと言ったんですけど、学校の教育はフォーマルエデュケーションって言われます。フォーマルな形、型が決まっている。型を決めないと、同じ内容をどこでも保証することができないからそれは必要なことなんですけど。でも、型がカッコリ決まってしまうと、それに合う人と合わない人が出てきてしまう。こういう内容はここで提供できますけど、他のニーズがある人はここだとできませんから、別のところに行ってください、という風になってしまう。むくどりなりの形を、どんな風につくってあげたいのかっていうのは、確かに難しい問題だったんじゃないかと思いますね。いろんな担い手が関わってくれるんだけど、それぞれの担い手ごとに、むくどりのイメージって実は微妙に違ったりしますよね。柴川さんの中で、大きくはこんな方向にいくって思っているけど、それを具体化していったときに、あるスタッフの人はこんな風に思っているし、別のスタッフはこんな風に思っているっていうことは、あったんじゃないかという気がする。若い人もあのとき関わってくれていたと思いますが、彼女も含めて、いろんな議論があったんじゃないかなと思うんです。いろんな人の意見を統合しながら、ブレないで、なおかつ安定した運営ができる仕組みを、どうつくればいいのかというのは、なかなか難題だったんだろうなっていう感じがしますよね。柴川さんの思いを全面に出して、こんなスタッフでこんな風にやってくれんすって言うてしまえば簡単なのかもしれないけど、そうするともうむくどりらしくなくなってしまいますよね。

川田：なるほど。そのむくどりらしさっていうの

は、まさに片仮名の「ムクドリ」とは何かにつながっていく問題で、後でじっくり議論したいと思っています。いまは馴れ初めの話に戻って、柴川さんもう少しお話しいただけますか。

柴川：カナダに行ってからのもくどりのことはいつも頭にあって、むくどり日記を読ませてもらうては、参加者のみなさんへということでメールで手紙を送っていました。それが一応 50 通近くあったと。それからカナダでの、悔しい悔しい思いをして英語に取り組んだ日記のようなものもあったと。娘が録音しておいてくれて、それをテープおこししてくれたものもあったと。生い立ちの記の方の原稿も、それ以前にある程度はまとめてあったんですね。そうしたらこれ、もちろん立派なものではないけれど、まとめてしまって、一回出してしまったほうがいいと思ったので、全部のところが未完成ですけど、出してしまったということになるんです。全部材料は揃っていたので、それをただまとめるだけの気軽な気持ちでやり始めたんですけども、それはとてもそんな気軽なものではなくて、一つ手紙をのせるにしても、関わってくださっている人への理解を得るとか、カナダの方の理解を得るとか、そういうことがたくさんあって、とても大変な作業ではあったんですけどね、とりあえずなんとかまとめました。

小林：昨夜また、再読してみたんですけど、生い立ちのところがやっぱり私はぐっときていて。まず一つは多世代多様な場というのは、今でも少ないと思うんですね。特に子育て支援の中ではまだまだ、多世代多様な場というのは少ないと思うんです。もう 20 年も、むくどりは前から実践してらっしゃいますけども。その、新しい形をつくった先人が、本当にひたむきにそれに打ち込んでこられて、20 年前に始めてスタートして今があるんだなと思ったのが、すごく感動して、ありがたいなっていうのと、私は勝手に(柴川さんのことを)師匠だと思っているので、多世代多様なというのを私はむくどりで学んだし、感じたので、それを、

引き継ぐって言ったならなんですけども、私なりに何か、多世代多様な場の効果を表現できるような場を継続していきたいという思いになりました。

3. 「むくどり」と「ムクドリ」

違うものの中に同一性を見る

宮崎：(柴川さんの本の)手紙の部分がすごく面白くて。面白いっていうのは、カナダのいろんな状況が紹介されてるのももちろん面白いんですけど、それよりも、柴川さんが自分のピピっときたところ、感性に合ったところを、スケッチして写真をとって表現されていますよね。柴川さんの感性はむくどりと一体化しているから、あるいはむくどり自体が柴川さんの感性を具体化するものだから、逆に、むくどりというスライドをカナダの日常の光景にむけて映してみたように見えたんです。うまく表現できないのですが、例えばタクシーの運転手さんとのやりとりも、むくどりの中にある要素がカナダではこんな形で表れているというように、全部そういう風に見える。ただ、カナダはいろんな面がもちろんあって、全面的にバラ色の世界ではなくて、暗いところもあるのでしょうか、その中でも柴川さんがピックアップされたところには、むくどりの理念と共鳴する現実が映し出されている。だから逆に、カナダのいろんな光景を拾い集めてみたら、むくどりからこんな社会が見えてくるんだなっていうの見える。むくどりの窓からはカナダがこんな風に見えるというか。そんな風に読めたんですね。さっき川田さんが言われた片仮名の「ムクドリ」っていうのは、多分そういうことかなという気がします。

川田：答えが出ちゃいましたね(笑)。

宮崎：もう一つは、柴川さんが英語に挑戦されたことと関わりますが、それは敢えて言えば「支援される」側に身を置いてみたということですよ。今までのむくどりを主宰する立場というのは、あ



る意味では「支援する」側だったと言えるかもしれませんが、こういう言い方がいいかどうかわかりませんが、英語というバリアに敢えて直面した、自分をそういう場に置いたわけですね。つまり英語という障害がある自分というものを、経験、追体験する。世間一般で言うとはそれは「支援される」側ということになるでしょうが、そういう立場からカナダの人たちとの出会いを振り返ってみたら、改めてそこからむくどりの意味がみえてきていると言うべきでしょうか。先ほど1年間の休みをとって、どうしたらいいのかを考える、あるいはむくどりの中である種の疲れを感じていたと述べられたのですが、柴川さんなりの総括の仕方だったのだらうなと思うんです。もう一度原点に自分を置いてみて、むくどりからみえるカッコつき、片仮名の「ムクドリ」の世界を見て、その中に自分を置いてみた。うまく言えませんが。平仮名の「むくどり」だと柴川さんは「支援される」側の立場になれないんだけど、「ムクドリ」っていうカナダの中では柴川さんは「支援される」側になっていて、そうすることで、「むくどり」の意味をもう一度自分なりに再解釈されたというか、意味づけられたんだらう、そういう総括の仕方だったんだらうなと思います。

小林：なるほど～。

柴川：そうですね。

宮崎：そういう意味ですごく面白かった。柴川さんがどこに着目されたのか、それから英語の学習の中でどんな風に格闘されたのか。あるいは格闘の意味づけを転換されますよね、最初は「1年間やってダメだったらあきらめる」と思っていたのを、後から振り返って「傲慢だった」と書かれて、自分自身の関わり方をもう一度転換して、むしろ「波に乗るように」っておっしゃったり。本当に伝えたいことがあるならコミュニケーションっていうのは別に英語じゃなくてもできる、というか……。英語は必要なんだけどそれは単なる道具でしかないというふうに考えられて、そのあたりは「支援される」側という立場の、なんとというか、立場の取り方の変化ということだと思うんですよね。それも面白いなと思っています。

川田：さきほど宮崎先生がおっしゃられたところの、平仮名の「むくどり」から、一度片仮名の「ムクドリ」をくぐってもう一回平仮名の「むくどり」を、というところの、片仮名の「ムクドリ」っていうのは一体どういうものなのかということかをちゃんと考察すると、色々考えられる感じがしますね。

例えば、平仮名の「むくどり」にいと柴川さんは支援する側にしかねないという話がありましたが、でも一方で平仮名の「むくどり」のときにも、支援者―被支援者みたいな関係をどう超えるかという議論もありますよね。しかしながら、そこに難しさもあるのかなと。平仮名の「むくどり」という場だけで、スタッフも、支援者でありながら支援されるのだ、ということを突き詰めていくことが果たしてできるのかということなんですけどね。これは、スタッフ論にもなってくると思います。思いつくまいうと、平仮名の「むくどり」が平仮名の「むくどり」であり続けるためには、片仮名の「ムクドリ」が必要なんじゃないかっていうことなんです。つまり平仮名の「むくどり」の中で完結した支援―被支援の循環構造っていうのは難しいのではないかと。柴川さんが平仮名の「むくどり」にいただけで、支援する

柴川さんでもありながら支援される柴川さんであり続けるということ、保ち続けるのは結構限界があって、やっぱりもう一方で、片仮名の「ムクドリ」、この場合だと一つの具体的な「カナダ」というものを通して、柴川さんの感性からカナダを見るってというような経験を通して、もう一度平仮名の「むくどり」に帰ってくるというようなことなんですけど。構造的に平仮名の「むくどり」だけで閉じてるのは難しいのではないかと。色々な片仮名の「ムクドリ」というものが、色々な形でありうるんじゃないかなっていう。

宮崎：そうだと思いますよ。キリスト教も、もちろんありますよね。生い立ちとの関わりになるのですが、自分の実践を意味づけるときのフレーム……そういう風に解釈していいなら、片仮名の「ムクドリ」というのは確かにあって、なおかつそれが、形が変わってきている、発展してきているんだろうなという気がしますね。もう聖書だけではないですよね。カナダの経験もあったし。それから、むくどりの中で、例えば5周年の記念冊子の中で前田さんが、これ（冊子化）をしたことで問題点がだいぶ整理されてきました、と言われていきます。実践を時々きちんと意味づけてらっしゃる。みんなで振り返って調査をしたり、今回もそうですけど、川田さんと振り返りたいということだったわけなんですけど、実践を自分達でちゃんと意味づけてなんとか言葉にしようとしてきたことも、さっきのフレームづくりに効いてると思うんです。平仮名の「むくどり」の外側だけにあったというのではなくて、平仮名の「むくどり」を自分たちで振返ることによって片仮名の「ムクドリ」にしていく、そこから理論化していくという努力もあって、そういうことが積み重なって、片仮名の「ムクドリ」が成立してきているのではないのでしょうか。

柴川：宮崎先生に言われて、初めてあっと気が付いて。やっぱり、カナダで体験したこと、全部やっぱりむくどりを通して見ているんですよね。すべ

てのことがそうなんです。英語教室なんかで、スタッフの対応の仕方を見て「あ、これはむくどりとおんなじだ」ということで、常に常にそういう観点から見てたんだと今日言われて初めて気が付きましたね。

川田：そのとき見ている「おんなじだ」というのって、当然人も違うし場所も違うし言葉も違うから、すごく一般化された形の類似性をそこで捕まえているわけですね。そうすると平仮名のむくどりの中にいるときには、具体的な固有の名前がある誰かと誰かの中で起こっていることだから、形だけを抽出するのは難しいけれども、固有のものに見えるけど、実は普遍的な形を持っているものかもしれないってことに気づく、というところがありますよね。そういう意味で、片仮名ね。

宮崎：写真を見たときにね、たまにあれって思ったんだけど、むくどりの写真かカナダの写真かわからないところが……(笑)、同じ光景として見えてしまうところがあって。多分そういう撮り方をされているんですよね。

川田：うーん……なるほどなるほど。

支援－被支援の循環構造

宮崎：さっきの川田さんの話に戻すと、支援する－されるという関係を超えていく場づくりですが、平仮名のむくどりの中だけだとそういう循環は成り立ちにくいんじゃないかっていう指摘をされましたが、そこはどうですか、小林さんも同じことになるのかなと思うのですが。

小林：難しいとは思いますが、できると思うし、それが片仮名のムクドリの場合じゃないかなって思いますね。支援の場っていう風には私はあまり思っていない。私が、平仮名のむくどりにいて感じたのは、障害のある人もない人もっていう思いで柴川さんはつくられたけど、私はちょっとまた違う捉え方、私なりの違う捉え方をしてい



て。

大事なポイントは、本当にどんな人もかけがえなく、大切な人なのか？っていう問いなんですよ。私にとってはね。「みんな違ってみんないい」というメッセージもありますけど、本当にそうなんだろうか？っていうのを私は自分に問いを立てて検証していて、それが多世代多様な場。片仮名のムクドリなんですよ。それって支援する場とかでもちょっと起こりえないことなので。さっき川田先生が、最初の方に言っていましたけど、本当にこの人ってだめだなとかどうしようもないなっていう人と、多世代多様な場で出会って、その人は学校とか職場とか家庭の中では、悪い面ばかり目立って見えるけれど、でも、多世代多様な人たちの中にいると、違う面、その人の持っている良い面みたいなものが引き出されて、そこで発揮されるっていうのを目撃したとき、周りの人にとっても、人を信用する、人の力を信じる力になるし、力を引き出された人にとっても、自分の生きる力になるという風に思えて。私は、生きづらい人たちがたくさんいて、生きづらい子どもたちもたくさんいるこの世の中に、それが新しい形として、何か活用されないかなと思っていますね。話がかわっちゃったかもしれないけど。

川田：いえいえ、だいじなポイントをおっしゃっていただいたように思います。「ねっこぼっここのいえ」⁸は、小林さんが平仮名の「むくどり」で子育て

で中の母親として経験したものをもとにして、いわば「のれんわけ」⁹して生まれた実践だとうかがっています。その意味で、小林さんが平仮名の「むくどり」の中から一般化した一つの条件は、自分にとって重要な問いに向き合えるというところなんだと、なるほどと思いました。

一方で、もう少し聞いてみたいのは、そうして生まれた「ねっこぼっここのいえ」にとって、片仮名の「ネッコボッコノイエ」ってないのでしょうか。柴川さんにとってのカナダのように、小林さんにとってのルーツであるむくどりではなくて、小林さんにとっての、柴川さんでいうカナダに相当するようなものとか。

小林：え〜〜〜あるかなあ……むくどりじゃなくてねえ……。

川田：全然違うものでいいと思うんですよ。一見、英語の話とむくどりの話って、普通の人が見たらどこに結びつきがあるんだろうって思うと思うんですよ。だけど柴川さんの中では、むくどりで行ってきたその実践のことと、英語の世界に身を置いていくっていうようなことがすごくリンクしていて、英語の学習をするっていうことと、むくどりの実践っていうのは一見全く違いそうだけど、でもすごくそれがむくどりの実践にも返ってきてるっていうようなところがあるので、全然違うものでもいいと思うんですよ。

小林：え〜〜難しくてわかんない（笑）。

川田：ちょっと複雑ですね、宮崎先生翻訳してください（笑）。

⁸ 札幌市豊平区私立しのめ幼稚園、月寒教会、子育て中の親の3者が協力して、2007年に開設された多世代交流ひろば。以前、むくどりホームでスタッフをしていた小林さんも立ち上げに関わり、むくどりホームなど市内のひろばを参考にされた。2011年度より札幌市常設子育てサロンの指定を受けている。

宮崎：片仮名のムクドリっていうのはカナダでの経験であったり、英語学習の経験ということだと思うんです。むくどりそのものではないんだけど、でもカナダのいろんな状況なり実践を見たときにむくどりと同じものが見えてくるわけですよ。違うものの中に同じものが見えるってことは、具体的な形じゃなくて、少し抽象的なレベルでね、「あ、おんなじだ」と。国は違うけど、場所も違うけれども、でも、ここに同じ匂いがすると同じ空気があるっていう風に取り取ったわけですよ。その同じものとして見えてきたものが、片仮名のムクドリなのではないかと思います。あるいは英語の実践でも、むくどりの実践とは違うんだけど、でもまるで日ごろむくどりで起きている出来事と同じ出来事が自分の中で起きているように、こちらは読み取れるわけです。そうすると今と同じで、第三のものというか、抽象的な同じものがあるって、それがあのおかげで、平仮名のむくどりという、あるいは平仮名のねっこぼっこのいえという、具体的な実践が、硬直化しないで、閉じてしまわないで、循環型として発展していけるのではないかという理解です。

「ネッコボッコノイエ」とは

小林：わかりました。問われている意味はわかりましたけど、ねっこぼっこのいえ……なんだろうなあ。むくどりしか考えたことなかったからなあ。うーん。

宮崎：私が、ねっこぼっこのいえのことを全部わかってるわけじゃないし、小林さんの活動の全部知ってるわけじゃないんだけど、例えば富山型デイサービスの惣万さん⁹が来られたときに参加されてましたよね、あるいはいろんな集会で話をさ

れると、他の発表者もいますよね、そのときに多分、おんなじようなものを感じてらっしゃるのかなあと。

小林：そうですね、忘れてました、富山型のこと。

宮崎：それが実践のモデルになってるわけではないかもしれないけれど……。でも、ねっこぼっこのいえってすごく発信されてるし、表現されてるんですよ、小林さん自身がね。地域の中でも多分そうだし、研究集会という場でも発信され表現されている。表現するといろんな他の受け手の人たちとのコミュニケーションが始まりますよね。そのときに、今言ったような作用が起きていて、全然違うところの、違った実践なんだけど、ねっこぼっこと同じことをこの人たちも追求してるということが、なんとなく見えてきて、それでまたその「同じもの」を手がかりにしてねっこぼっこの特徴、意義、あるいは方向性が見えてくるっていう経験を積み重ねていращやるじゃないかって思うんだけど、どうでしょう。

小林：そうかもしれませんね。でも、むくどり以外で言えて言われたら、やっぱり富山型だと思いますね。やっぱり赤ちゃんからお年寄りまでいる、いろんな相乗効果が起こってるっていうところが、やっぱり一番そこが私は面白いと思ってるし、さっきも言いましたが、どんな人も、本当に大切な存在なのかっていう問いを私はずっと立ててるので、その答えが、ヒントが多分そこにあると思ってるから、それを求め続けてるのかなと思いますね。

川田：なんか、もうちょっとこだわってみると、今小林さんがおっしゃったことっていうのはね、モデルの話のような感じがしたんですよ。つまり、むくどりだったり富山型っていうのは、同じような思想を持った実践。それを、もっと自分たちが発展していくために、どうしたらいいだろうっていうときの、ある種ヒントを与えてくれるような、

⁹ 惣万佳代子さん。制度の枠を超えて乳幼児から高齢者まで、また障害の有無に関わりなく、誰もが集えるサービス・居場所づくりを進めてこられた。今では、そのような実践は「富山型デイサービス」と呼ばれるようになっている。2014年に子ども発達臨床研究センターにおいて講演をしていただいた。

モデルであるようなもの。当然それは自分たちのところでアレンジされるんだけど。片仮名の「ムクドリ」っていう話はモデルともちょっと違うような感じが……。自分で言っていて、うまく整理できないんですけれど。

小林：もっと違うほうがいいのか……。？（笑）

川田：うん（笑）。いや、だからそれは、小林さんにもあるはずだ、それは一体なんだった話ではなくて、そうではなくて。なんだろう、だから、全然異質なもののの中にあるかもしれないんですよね。

片仮名ということの一つの意味は、個人にとってはそれが多世代だったり、少し年齢が離れた人との関わりのように、異質さの中にある共通性のようなものなのです。同質的な集団っていうのは片仮名のものが出てこない感じがするんですよ。同質性が高すぎると、自分自身を照り返す、違う角度から照り返すことができない、というか。さっき平仮名のむくどりだけだと支援－被支援の循環構造が難しいということはないか、と言ったんですけど、ちょっと言い方を変えると、同質性が高いとコミュニケーションが固まりやすいとか。

参加者の異質性を目立たせないようにする場がありますよね。例えば、公的な支援センターとかだと、「お客さん」とか「利用者」として迎えられることが多いですよね。確かに、迎えてくれる保育士さんとかスタッフさんと、行ってる利用者っていうのは異質ではある。支援する人とされる人。でもそれってなんていうか、「役柄」とか「立場」なんですよ。どうしても演じる部分があるわけですよ。利用者としての振る舞いを演じるし、保育士は保育士としての立場から関わったりするのであって、初めからどう振る舞うかっていうのがある程度予測できるようなものなんです。もちろん、それは専門性ということでもあるし、予測できるコミュニケーションは安心でもある。でも、場合によってはそれは支援者と被支援者の線引き

をする機能もあって、役割が固定するという面もあります。そういう意味での異質性はある。

でも、そういうあらかじめ決まったものではなくて、コミュニケーションの中で現れてくる異質性というのがありますよね。それって結構ドキドキするものだし、ある意味で生き生きしたものなんですよ。そういう生きた異質性みたいなものが現れてくる場所っていうのは、片仮名が潜んでいるところとかですね、自分自身を状況に埋没させないで、常に反芻させるような作用を与える場になって。そういう言い方をするとなんか、おちおち気を抜けない場のように感じる気もするんだけど、必ずしもそれだけでもないとか。



4. 同質、異質、均質

宮崎：同質異質というのは結構難しいと思うんですけど、柴川さんはカナダに行って、カナダの人たちとある意味でむくどりと同じ空気を感じたわけですよね。もしそれを同質って言うなら、同質ですよ。そのことによって片仮名のムクドリが見えたとも言える。

川田：さっきも異質について、役柄として与えられている「初めから与えられている異質」という話をしましたが、それと同じで、同質も例えば、4年生なら4年生で与えられる同質というのはただ年齢が同じというだけじゃないですか。それは別に個人の多様な側面を表しているわけではなくて、たった一つの基準で同質化されているわけで

すよね。そうすると4年生的に振る舞わなければいけないし、4年生同士と関わるということが求められる。これは言わば、「外側からの同質性」。でも、柴川さんがカナダに認めた同質性というのは、そういう外側からの同質性ではなくて、生きたコミュニケーションというものから生まれた、ある形というものをそこに能動的に見ていくプロセスがあるわけで、それを「外側から」と対にすると「内側からの同質性」と言っているのかもしれない。

宮崎：私は、外側からの同質性って言われたときに、あまり一般的じゃないかもしれないけど、均質な他者、均質化されてしまった他者、という言葉を使っています。のっぺらぼうで顔がない。それからさっき、公務員として業務に当たっている人の話がありましたが、規則に従ったサービスを提供したり管理人をしたりするときにはAさんBさんという個性は別にいらないですよ。全部同じ対応をしなければならないし、それが求められている。そうすると、本当に均質な他者に見えてしまう。さっきの同学年という話も、そういう風にくくると、例えば10歳だったらみんなこういう傾向を持っているんだと、先生はAくんBさんがいるにも関わらず、均質的に10歳児とかあるいは4歳児とか、そう画一化された視点でしか人を見

なくなってしまう。そういう反応しか先生の目には入ってこない、あーあれは4歳児だから仕方がないよね、みたいな言い方になってしまう。そうになったら、同質というのも、怖いですよ。そこでは自分を表現するにしても均質化された他者が受け入れるような表現をしないと、コミュニケーションが成り立たないので、そこから逸脱することはもう許されないことになる。

川田：外側から、あるいは均質化された同質性で人を、例えば子どもを見たときには、その同質性から外れる場合には、問題として見られますよね。そうすると、その問題は発達上の積み残しがあるとか、何か障害があるかもしれないとか、心の病があるかもしれないとか、外側の基準に照らして、個人を見るということになる。徹底的にその子どもを疎外していくわけですよ。だから、同じ同質性って言っても、柴川さんがカナダに見ていた同質性は、外側の基準に当てはめて見た同質性ではないんですよ。例えば、異なる子育て支援拠点だとしても、行政的な基準で質評価されたときに同じような結果になることはあり得ます。でも、そこでいう場の同質性というのは、やはり外的なものです。柴川さんがカナダで映し出したものというのは、あくまで実践に内在的に、生きてつくられた内側の同質性を当てはめて見ているという



ところで、根本的に違うなと。

少し共通の言葉を整理するために、宮崎先生の観点から同質と異質と均質を区分していただけないでしょうか。

宮崎：いろんな他者との関わりで我々の自己は形成されると考えたときに、どういう他者かというのはすごく大事だと思っていて、均質な他者と同質な他者と異質な他者を、一応分けて考えています。

同質っていうのはまさに、連帯的な関係だと思うんですね。セルフヘルプグループで、私のことをわかってくれる人がようやく現れて、自分一人だと思っていたけどそうじゃなかったっていう出会いはどこでもありますよね。むくどりの中でもそういったことはあると思うんですけど、そのときは、他者との間に自分との共通性を感じて、同じなんだ、私だけじゃなかったんだと思う、そういうときは同質を使う。

均質なというのはさっきの行政対応が典型だし、もっといえば商業サービス全体がそうなんですけど、他者としていろんなサービスを提供してくれる、コミュニケーションするわけですが、通じないわけですよね。契約をするための話し合いでしかないので、あなたの個別的な事情についてはいちいち考えられませんかと言われてしまうかもしれない。そんなプライベートなことにこっちは関与しないと言われかねないような、そういう他者はありうるんですよね。その他者との関わりの中で自分をつくっていかなければいけないという面も現実にはある。みんなそこで苦しむ。

異質っていうのは、川田さんが言われたように、同質だと思ってたんけど話してみたら他者である限り差異が必ずあって、その違いがさらに高い連帯を生み出していくというか、あるいは自分自身を深く問い直すきっかけになっていくような、そういう異質性は大事だと思うんですよね。川田さんが言われた平仮名むくどりの話でいえば、まさに同質であれば、セルフヘルプグループでもそうですが、下手をするとその集団の中で閉じこもっ

てしまいますよね。そこに行けばみんな心が安らぐんだけど、もう一歩そこから外に出たら自分のことを理解する人がいない世界になってしまうので、口をつぐんでしまう、しゃべれなくなってしまふ。そうになってしまうと、居場所なるものが実は社会的には隔離された場所になってしまうと、社会とのつながりを失ってしまう。その場を提供している人も、ある種の防衛をしなければならぬ。ここに入ってくる人はこういう条件を持った人、という風に、敷居をつくってしまう。そうすると循環的にはならないですよね。循環的ということは開かれた支援の場、支援っていう言葉自体がどうかって小林さんさっきおっしゃられましたが、私はあまりこだわらず最近使うようにしてるんですけど、その場自体が開かれるということと循環型ということがイコールだとすると、川田さんが言われたような意味での同質であれば閉じる可能性は確かにあると思います。

5. 支援者の当事者性

カウンター越しの心理

宮崎：小林さんの話との関わりで思ったのは、その際に、支援者の側の当事者性が問われるというかな。どうしようもない「だめな人」が本当にだめなのかどうか、ということは、小林さんの中にも、こう言っていていいかどうかかわからないけど、もしかしたらそうなのかなと思う自分も心の中に半分いて、そう思う自分自身を自分で認められない。それは逆に言えば自分自身への問いですよね。自分自身の生き方に関する問いですよね。

小林：そうです。

宮崎：私は一体何者なんだろうという問いが、支援者の側に同時に生まれていて、その問いをなんとか解決したい、深めたいと思って実践の場に臨んでいるわけですよね。つまり支援者の側も同じく悩んでいるし、そういう意味では当事者性を持たざるを得ない。柴川さんの場合もバリアフリー

にける思いの背後には同じような問いがずっとあった。なおかつ今回カナダに行かれて、自分が言語的バリアの外側に置かれる、敢えてそういう立場をとったのですが、そこで自分自身の当事者性を改めて確認されているのではないかと思ったんです。それはさっきの、川田さんの異質性があることが重要だということとどうつながりますか？支援者の当事者性が循環型のもし鍵だとすれば、その側面と異質性を保ち続けることが大事だ、ということは……。

川田：自分のさっき使った言葉で言うと、外側からの異質性というのは、ある種均質化された、役柄ですよ、社会的な。そうした外側からの異質性の場合に循環構造にならないのは、やはり当事者性が芽生えないからだと思います。なんでそうなのかは別途考える必要がありますが、自分はこの立場からものを考えているのであって、本音で利用者の問題に心を響かせる必要はないのだという、自己限定をかけるような、そういう心理作用が働くのではないかと思うんですよね。それはある種自分を守るためでもあるでしょう。

一方で、内なる異質性を持っているコミュニティというのは、立場でものを言うのではない形で、人と出会うことになっているコミュニティです。そこでは、他者の抱えているものに向き合わざるをえないときに、自分自身の問題にも出会ってしまうということだと思うんですよね。それはいわゆる専門職には脅威だと思う。でも、他者と出会うことによって自分に出会うという回路、他者と出会うことによって自分が変わるという回路に対してあまりにも臆病というか、鈍感になってしまうのが今の社会かなと。それによって、硬直性が極限まできているというのが、我々の生きづらさの根本にあるような感じがします。

宮崎：うん。

川田：ただ一方で、私は今まで、保育園とか幼稚園とかの先生たちとの交流が一番長くて深くて、

結構公立の先生たちとの関わりも多いんですね。公務員として仕事をしてるから縛りは色々あるんだけど、カウンター越しで応対したりとか、書類の中だけで「山田太郎さん」という人と相対してるわけではなくて、匿名的でない、顔のある子どもや親と関わっているじゃないですか。そういう中では、公務員であっても、どうしてもね、揺れちゃうんだと思うんですよ、相手と一緒に。何かこう、基準があってその線引きから何かを言うっていうよりは、どうしても一緒に問題の中に入っていくってしまうという局面があって。だから子育て支援とか保育とか、そういうカウンター越しではない場合には、公務員という立場があったとしても揺れ始めるという、やっぱりそこが、すごく面白いし。それで、その揺れを抑制しすぎてしまうと、仕事が辛くなったり、続けられなくなったりするような気がします。保育士さんとか先生っていうのは、その身体性を失ったり抑えすぎたりすると、きついんじゃないかな。子どもや保護者とかとね、心理的な距離ができてしまったりとか。だから、単純に「公務員だから」という話でもないだろうなと。要するに、出会い方が「カウンター越し」かどうかみたいなことかなって。

宮崎：その、「カウンター越し」ということと、当事者性とはどう関わる？

川田：そうですね。書類処理の業務とかカウンター越しの対応だと当事者性は発生しにくいかもしれないけど、子育て支援拠点とか、カウンターなしでふれるような保育のような場面だと、宮崎先生が言われた均質性が破れて、当事者性が現れてしまうようなことがあるんじゃないかと。で、当事者性が現れると、起こるのは、応対に差別化が起こるっていうことなんですよ。これは良い意味でも悪い意味でも。比重が出てくるので、やっぱりそこに、公的な立場にある人は戸惑うのかもしれない。揺れ始めてしまうっていうことが。で、自分としては、実はそこに、仕事が続けられることの大事なポイントがあるなと思っ

てるんですね。

「ただ立場をこなすこと」による当事者性の減衰という問題については、アイヒマン実験という有名な社会心理学の実験があって。

柴川：アイヒマン？

川田：アイヒマンというのは、ナチスの官僚の名前なんです。アイヒマンという男性の。

柴川：ああ、そうですか。

川田：なぜナチスドイツはあれだけ残虐なことができたかということを検証したときに、一般的に考えられるのは、残虐な人間が残虐な行為をしたってことですよね。ユダヤ人の大量虐殺で色々指示を出していたアイヒマンというのは、どれだけ残忍な男なんだろうって、みんな思ってたわけです。でも、戦後の裁判に出てきた彼っていうのは、ただの普通の役人で、どこにでもいそうなおじさんだったんです。そのことにみんな衝撃を受けた。

そこから、権威への服従の心理に関する実験が数多く行われました。どんな人でもナチス的な状況に置かれると、残虐な行為に加担してしまうかもしれない。それは、権威に服従してただ役割を淡々とこなしているっていう構造がですね、ある種書類を処理するように人を殺すことを可能に

してしまうということ。誰にでも起こりうるとは言えないんだけど、でも過半数の人が、実験者（権威）の命令に従って、壁の向こうにいて言われている相手に致死量の電流を流してしまう。もちろん、実際にはそんな残忍なことはしていないのですが、被験者は本当だと思い込まされている状態で、スピーカーを通して悲鳴を上げている相手の声（録音）が聞こえてくるのに、電流のダイヤルを回してしまう。

ただね、やはりアイヒマン実験というのは、相手は匿名的な誰かで、見えないんですよ。向こうにいてって言われて、悲鳴だけは録音したのが聞こえてくるんだけど、実際に顔を見てるわけではないし、誰かもわからない状態。でも、やはり子育て支援とか保育というのは、カウンター越しではなくて、目の前に名前も顔もある人がいるという状況だから、アイヒマンには徹しきれないはずなんです。公務員だったら、ある種「アイヒマンであれ」っていう命令があるわけですよね。役人として振る舞えってことがあるんだけど、一方で「当事者であれ」っていう命令が、関係の中で出てこざるをえないので、その葛藤の中で教育とか福祉の公務員は仕事をせざるをえないんだろうなと。

自分は偶然なんですけど、公立の人たちと仕事をするが多かったんです。その中で、子どもや保護者に対しても、あるいは同僚の間でも、淡々と、アイヒマン的に当事者性を切っていくという風になると、そういう先生ってね、結構仕事がつくっていうか。続けられる人っていうのは、天然なのか意図的なのかは別にして、当事者性というものも失わないで、バランスを取りながら進んでいく。そういうジレンマを抱えながら仕事を続けていくための研修のあり方というのを、保育者と一緒に考えて学んで、10年くらいやってきたんですけどね。

鍵となる支援者同士の当事者性

宮崎：その支援者の当事者性っていうのは、どういうものとして考えればいいのでしょうか？なぜ相手と共に揺れるのか、どこで揺れるのかっていう



ところは……。

川田：保育者たちと研修やってきた中で、鍵だなの思ったのはね、支援者同士ってというか、保育士だったら保育士同士の間での当事者性がちゃんとあるってことなんですよね。同僚性って言うのもいいと思うんですけど。仕事をしている仲間だっという意識が育ってくると、自ずと自分の仕事の対象である親子への関わり方が変わってくるといふところがある。まあ、すごく具体的な研修の内容で言うと、島に行って合宿するとかね、バンガローに泊まるとか、そういうことやってたんですけど。遊び心を持ってね、いろんな手づくりの研修を5年ぐらいやってると、だんだん響いてくるものがあります。特に、若い人たちには効果が大いと感じています。島で一緒に合宿した人たちが、今20代の後半や30代になってきていて、新しいリーダーになってきているという印象を持ちます。

だから支援者の当事者性というのは、支援対象というか、そこに来ている人たちとの間だけではなくて、一緒に仕事している人たち同士の間で当事者性がないと、もう一方も芽生えないんじゃないかなって。むくどりの人たちと話していても、スタッフの間柄での出来事の大きさを感じます。例えば、第Ⅱ部のスタッフ論文で藤井さんが書かれています、自分の子どもが事故にあって、感情むき出しになってしまった自分を、同じスタッフにしっかり受け止めてもらったときに、そこで得た「その場に対する信頼」というものがすごく強烈だったという。藤井さんなりのむくどりの検証の、それが原点なんだと感じます。自分自身のむき出しの感情が受け止められたっていうようなところからすべてがスタートして。ちょっと宮崎先生が聞いたことと外れたかもしれないけど……。

宮崎：最近考えてることで、いいですか。どこでもこの支援者の当事者性が問題になるんですけど、例えばこの図式（図1）で、こっちが支援す

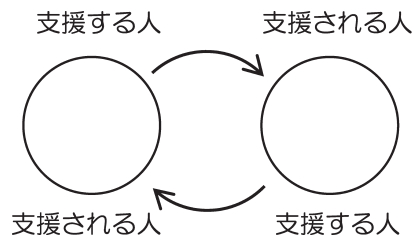


図1 支援する人と支援される人

る人でこちらが支援される人という図式で考えると、普通は支援実践って、こういう流れで考えるわけでしょ、支援される側が支援する側になるってというのは、こういう言い方ですね。これが循環するという言い方なんだけど、ちょっと違うのではないかって思っています。支援実践というのは、さっきも言ったけど、この両者が、協働で何かをつくり出していく実践なので、実践を一緒になってつくり出してるという意味では、こちらも、こちらも、両方とも当事者なのではないか。だから、自己と他者っていう言い方でもいいのですが、両者の間に生まれてくるものがあり、それがそれぞれの新しい自分をつくっていくリソースになる。この、両者の間で生まれてきたものは、支援者だけがつくり出したものでもないし、言われるところの被支援者だけがつくり出したものでもない。つくり出したのは私だ私だって言い合っても意味がない、みんながつくり出したものだから。そのみんなのものを、それぞれが分け持っている。乾孝¹⁰という人が『私の中の私たち』っていう本を書いています、私の中に私たちがいる、その私たちというのは、この一緒になって生み出したものであり、支援者と言われるところの支援者としての私の中にも私たちがいて、支援され

¹⁰ 乾孝（いぬい たかし：1911～1994）。児童心理学者。法政大学教授等を歴任。1937年、城戸幡太郎（きど まんたろう）の保育問題研究会の結成に際し、法政大学心理学研究室助手として会場提供に協力。1953年の東京保育問題研究会の結成にも参加し、「伝えあい」保育を理論化した。『私の中の私たち：認識と行動の弁証法』（1970年、いかだ社）、『伝えあい保育の構造：未来の主権者を育てる保育』（1981年、いかだ社）ほか。（大泉博編著（2003）『日本心理学者事典』クレス出版を参照した）

るっていう立場にいると言われるところの人にも私たちがいて、その私たちは共通というような理解をしています。そうすると、みんな当事者で、一緒になってつくり出してる限りはみんな当事者だって、言ってしまうっていいのではないかしらうんだけど。

小林さんを助ける「場」!?

小林：私もそう思います。なんか、こっちが白さんだとして、こっちが黒さんだとしたら、白と黒が一緒になって、新しい何かを見つける（図2）。一緒に試行錯誤するっていう風に思っていて、新しいものを何かを見つけるために、もしかしたら役割ってというのがちょっとあってね。もし支援者って呼ばれてる人たちが白だとしたら、場をつくる役割みたいなもので、例えば誰かを呼んでくるとか、新しい人材を呼んでくるとか、話し合いの機会をここでつくるとか、つくれるような仕掛けをしたら、そういう場づくり。でもこの黒の人たちはこの人たちで役割があつて。黒さんが参加者さんとか若者とかだとして、実際に来てくれて、いろんな問題を持ってきてくれて、そしてみんなが、なんていうのかな、課題を持ってきてくれて、提供してくれるって言うの？話題を。話題を提供、考える内容を提供してくれるって言うの？で、白の人は白の人で、じゃあその持ってきた課題をみんなであつてちょっと考えようかって、そして新しい何

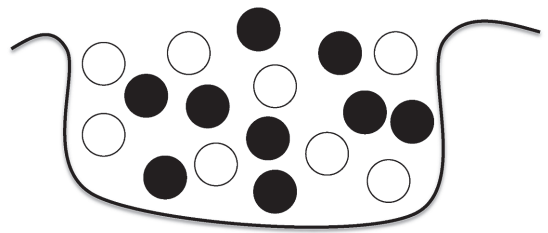


図2 白さんと黒さんは一緒に試行錯誤する
(小林さんのイメージを図に書きこむとどんな感じになるでしょう？自由に絵に描き加えてみてください。)

かを生み出すっていう、なんか、そういう共同で一緒に何か新しいものをつくり出すっていう感じに私はすごく近いと思うんですよね、居場所って。

川田：なんか、その話題や問題をね、色々持ってきてくれるっていう話、これって通常の、いわゆる子育て支援というカテゴリでね、枠組みで考えると、あんまりない感じがしますね。多分、一般的に言う子育て支援だったら、問題は起こらないほうがいいっていう風に考えると思うんだけど、むしろその、問題を持ち込んできてくれるっていうことが、その場として不可欠だってことになってくると、これは相当違うもののようにも思えるんですよね。なんでそういう風に思えたのかなっていうのがやっぱり、すごいなと思うんですけどね。



小林：だって、問題を持ち込まないと、私の問いの答えは出ないからです（笑）。

川田：なるほど！そっか（笑）。

小林：いろんな問題が起きる過程の中で色々考えながら私は、本当にみんな必要な存在なのかなっていう答えを見つけないです。だからやっぱり、いろんな人が考えとかを出し合って、新しい形を見つけるっていうことがないと、だめなんです。

川田：なるほどな〜〜。そうすると、そうか、小林さんはやっぱりだから、なんていうか、場をつくるって言っているのがわかった。小林さんが、支援ってあんまり思っていないっていうのはよくわかった、今で（笑）。

小林：わかった？自分のためにやってる（笑）。

川田：そうそう、むしろ逆で、みんな小林さんを助けてるんでしょ？（笑）。

小林：そうそうそう（笑）。やっぱりそうなんだなあっていう風に納得させてくれるし、この私と同じような位置にいる人もこの中にいることで、あんなに変わる、変化していく、と思うしね。そうなんだよね。

6. 多世代多様な場

どんな人もかけがえのない人か

川田：多世代多様な場というものについて、もう少し考えてみたいと思います。小林さん一番最初にね、「多世代多様な」というのを、むくどりから学んだという風におっしゃって。あるいは「多世代多様な場」の効果っていうのは何なのか、というようなことをおっしゃって。小林さんにとって、むくどりから、多世代多様であるってことの何を学んだということなのでしょう？小林さんの問いに答えてくれる場っていうのは一つの真理として

（笑）、もう少し広く、みんなにとっての意味を考えてみると。

小林：さっきの話に通じるものがあるんですけど。もしかしたらどんな人もかけがえのない、必要な人なのかなっていうのを、可能性を感じた場、ですね。私にとっては。もしかしたらそうなのかもしれないと思える、希望を見出せた場、かなあ。あんまり人っていいもんじゃないとか、信用するものじゃないとか、あの人はあだからだめだとかっていう生き方ってすごく苦しいんだと思うんですね。でも、多世代多様な場っていうのは、その人の持っている良さが引き出されたりするので、そういうのを見ると、あの人あんなところもあるけどこんなすごいところがあるなとか、やっぱりこの人必要だと思えることがあって。私はその問いに対しての希望を見出せた場だと思っていますね。

生きづらさを抱えている子どもたちも若者もいて、その子たちも同じような問いを立てているような気がするんですね。でも私もその問いを立てていて、その子たちに、どんな存在も必要な存在なんだよって言える立場ではなく、私も生きづらさを抱えている子どもたちと同じ問いを立てている当事者であって、その多世代多様な場で、その子たちと一緒に本当にそうなのかなっていうのを一緒に検証しようよという感じで、あの場を楽しんでいるかなあ。そうなんだよって教える立場じゃなくて、本当にそうなのかなあ？みんなの中で一緒に感じたり体験してどうなのか自分なりの答えをみつけられたらいいなと思っている、私も当事者ですね。

でも支援者としての立場もあって、それはみんなを導くとかではなくて、多世代多様な場の、場づくり、場をつくるための支援をするのが私の仕事だと思っていて、その場にあらゆるいろんな多様な人をどう呼び込むかとか、外部の人たちをどう呼び込むかとか、考える機会の場をつくる、みんなでちょっと考えてみようよ、みたいなのを、場をつくる支援者。その中で何が行われるかは私

自身もわからないし、それを楽しむ、それを感じたいと思っていますね。方向性はどうかかわかんないけれど、でも私の仕事は多世代多様な場づくりのための支援っていう風に捉えています。なんか、そういうのをむくどりで私は学んだかなと思いますね。

何でも話し合いますよ、むくどりは。何か困ったことがあったときに、スタッフでこうしようっていう風な、方向性を決めるんじゃないくて、参加者さんに「こういう問題が起きたのだけどうしたらいい？」みたいなことを投げかけるんですよ。結構それは衝撃的で、私にとっては。なんか普通支援する人って「こういう場をつくりましょう」みたいな、もうこう決まっているから、みたいなのを、打ち出すっていうイメージがあったんだけど、むくどりさんはいつも困ったことを参加者さんにどうしたらいいでしょうかねって聞いたり、小学生のこういう困ったことがあったんだけど、みんなどうしたらいい？という風に、みんなで考える機会をよくつくっているということがあって、それがすごいなって思うし、みんながそれについて向き合ったり考えたりすることが大事なんだなってことを、むくどりさんで学んだかなと思いますね。それが片仮名のムクドリをみんなが自分なりに考えている場を、機会をつくっているっていうところ。行けばそこがほっとするっていうような場じゃない、私はそう思わないな。そこに楽園があるというようなむくどりでなくて、一人ひとりが片仮名のムクドリってなんだろうっていう風に向き合って考えられる場なのかなと思います。

川田：小林さんからそんなことが……（と柴川さんを見る）。

柴川：そういう風に思ってくれていたんだと思って、そのとき私は何を考えていて、どこにいて何をしていたんだろうと思いました。

小林：本当に素敵なエピソードがいっぱいね、む

くどりは本当にあって。

柴川：一つ話して。

ここで小林さんから、かつてむくどりホームで実際にあった出来事のひとつが語られた。そこには、不器用に生きる若者と、幼くして天に召された男の子の、小さくも人間的な出会いがあった。どんな人にも美しい部分があり、そこに光が当たる瞬間があるということを、深く心に刻むエピソードだった。

宮崎：むくどりホームは、バリアフリーの公園から始まるわけですが、そのバリアってなんだろうと考えたときに、制度的なバリアはもちろん、それから健常者と言われる人たちが暗黙のうちにつくってしまっているバリアもある。例えば、「あの人のしょうもないよね」という場合は、大人の通念として世間一般で暮らしている人たちの共通の感覚になっているもの自体がある意味ではバリアになってしまって、人を仕分けることになるそのバリアができると、あなたはこっちと分けが簡単にできちゃうわけですよ。こちらの方に仕分けられた人に対してはこういうような、カッコつき支援をしていけばいいんだとなってしまう。

バリアフリーということはそれをなくすということだから、そこではある種のトラブルというか、それは起きて当たり前ですよ。どんな人が来るかわからないし何が起きるかわからない。あらかじめプログラムが決まってない場合も多いわけですよ。だからどんな風にその場が展開するかについても誰も見通しを持ってない。これも行政なり世間一般からすると、無責任な場にも見えるのかもしれないし、危ういというか、危なっかしい場に見えるかもしれない。子どもの保護者の中にもそういう風に思う人がいるかもしれないですよ。だけど、そこで線を引いてしまったらもう一度バリアをつくることになってしまいますよね。

だからバリアフリーと言うからには、線引きを簡単にしてはいけない。「この人どうしようもない奴だ」って思っている、本当にそうなのかと自分の心の中にできてきたバリアに挑戦しないとイケないわけですよね。つくらないようにどこまで頑張れるのかっていうのはチャレンジです。そのチャレンジをしている人は当事者って言うといいと思うんですよ、私は。

そのような線引きをしないで、その場をどんな風につくり上げていけばいいのかっていうことは、誰も答えを持っていないからみんなで話し合うしかありませんよね。特権的な地位にある人が、こうすれば解決できるんですよって言ったら、それも一つのバリアになってしまう可能性がある。そういう実践をやってこられたっていう風に考えれば、「綺麗な話」だけじゃなくて、どうしていいかわからないような状況の中でどう対応してきたのかってことが大事だと思うんですよ。

小林：これはねっこぼっこのいえの話なんですけど、ある日ふと若い男の子がパッと入ってきたんですね。パッと見た瞬間、もしかすると精神的な障害を持っている子かもなって、思ったの。まあ、子育て中のお母さんもたくさんいて小さい子もいるからね、私は一瞬困ったなって思ったんですよ、知らない人だし。でも、どんな子かわからないけど入って来たから受け入れて、私が隣にいるようにして、まあちょっと、どんな子なのか探りを入れたいとか思って対応していたんですけど、私も

忙しくて、最初の方は隣りにいたんだけどその子長くいたのでそのうち動いてしまい、多動傾向なのか、あちこち動いちゃったりしてて。そしたら、そんなに常連でもないけどたびたび来ている地域のボランティアの方が、その子の隣についておしゃべりしてくれたんですよ。その子は長らくボランティアのその方とおしゃべりして、そしてしばらくして帰った。

私が、その子が帰ってから、ボランティアのその方に「やー助かったよ～」と、言ったのね。それは、あの子が来て心配だったけど、忙しくて私は途中から対応できなかったから、隣にいてくれて、見ててくれて助かったっていう意味で私は言ったの。みんな不安だったと思うからね、よく見てくれたね助かったわって。私は心の中でもうあの子には来てほしくないってどこかで思ったの、ちょっと怖いなって。そしたらそのボランティアさんが言ったの。今日は来てよかったと。あの子に出会えて今日よかったって。私の息子も自閉症だと。自閉症で、重たい。だからあの子と同じなんだって。でも、ああいう子も、こういうところに来れるんだって、今日は思ったって。うちの息子みたいな子でもこういうところに来れるんだなって思って、いや～今日は本当にねっこぼっこのいえに来てよかったわ！って。あの子に出会えて今日は本当に良かった、って言ったのね。そのときに、私は、来てほしくないと思った、あの子のこと、それはしょうがないとする。それが今の自分だからね。だけれども、私はそう思った



かもしれないけど、多世代多様な場の中には、あの子の存在を喜ぶ人もいる、私では受け入れられなかったかもしれないけれども、いろんな人がいる場の中には、あの子のことを喜ぶ人もいるんだって思ったのが、すごく、嬉しかったし、助かったって思ったし、それが多世代多様な場の力なんだなと思った。私は代表であるけれども、私が受け入れられない人たちもいる。けれども、いろんな人たちがいるその中で、誰かその子がいたことを喜んでくれた人がいるっていうことがすごく助かったなあとと思うし、それが、そういう場所の力なんだなあって思いました。場の力っていうかね。学ばせてもらったね。あの子に。今はもう来ても大丈夫だけど。

川田：その青年はその後も……

小林：来てます、来てます(笑)。もう大丈夫になった、慣れたから。何回も来ると大丈夫なんだなと思うけど、最初ポッと現れて、目もくるくるくるって定まらなくて、ちょっとこわいなあと考えて、困ったなって思ったけど。でも最初に来たときに私だけだったらもう来なかったでしょうね。あのボランティアさんがいて、受け入れてくれたから今も来てくれているんだと思いますね。

場に複数の見方があるということ

柴川：いろんな人がいろんな見方をしてくれる。ありがたいことですね。さっきの(小林さんの話したエピソード)の青年じゃないけども、(ある青年の)足がくさいから、くさいくさいって子どもたちが言うの。それでどうしようかってなったときに、私にはとても思いつかないことを他のスタッフが思いついて、じゃあ足を洗おうということで、タライを用意して、そして足を洗って、靴下を用意して、そしてそれからみんなのところに行く、ということになって、いまだにそれが続いているんですよ。あんなことをするなんてずいぶん失礼なこと言うねっていう批判も、言う人もいますよね。だけど私は、ああ、こういう見

方、こういうやり方もあるんだなあって。本当に感心して、私ではとてもできなかった、私だったらどうしたらこうって思ったけど、嫌がりもせずに毎回来て。そういうなんか、いろんな見方をいろんな人がしてくれる。受け皿の中にそういう人たちがいることはね、すごくありがたいことですね。

宮崎：どうしてそういう見方ができたんですかね？

柴川：彼女(スタッフ)ですか？私もわかりません、どうしてっていうことは今まで聞けなかったですけども。そのくさいのを防止するには、足を洗って、清潔な靴下を履かせればやれると思った。そのことだと思うんですけど、それを実際にちゃんとタライを用意して彼のためのタオルを用意して、そして毎回別な部屋でちょっとそれをして、そして来るんですよ。そういうのはだいたい前からあったので、続いているのかなあと思ったら本当に毎回続いているんですよ。入ってきて、あーなんて言って、ちゃんと彼女は。他のスタッフもそれに合わせて、やって、気が付いた人がやってますけどね。どうしてそういう風にやったかっていうのを詳しく聞いたことはないんですけど。

宮崎：柴川さんのカナダの経験ですが、英会話の教室に行かれますよね。下手をすると、英語ができない人っていうラベルをはって、英語ができない人はみんなこんな風にトレーニングをすればいいんだっていう対応をされたかもしれない。けどそういう対応じゃなかったわけです。個人レッスンまでやってくれる人も出てきたりね。(本の)どっかに書かれていたけど、実は柴川さんの話を聞きたいからだ、英語を教えたからじゃなくて柴川さんの話が面白いから、聞きたいからレッスンしてるんだみたいなことがどっかに書いてありましたよね。つまり、もしも英語ができない人っていう風に見てしまったら、さっきの言い方だと

均質な見方になってしまう。だけど柴川さんの話が面白いから聞いてみたいなという、ちょっと視点がずれるわけです。

今の話の流れでいけば、一つの見方じゃなくて複数の見方ができているという、多様な見方ができている。視点をずらすこと、違った角度から光を当てる、それがどうして成り立つのかを考える必要があると思う。例えば、精神障害を持つ人に対するある種の警戒心とか恐怖心とか不安を抱くということは、必然といえば必然かもしれない。まったく状況がわからないと予測できないこともあるわけだから。でもみんながそう思わなくて違った見方をしている人がある。

小林さんの経験に即すると、今は小林さんの中でも違った見方ができてきているということですよ。このように見方が多様化していくというのは、どうしたらできるのか。今はどちらかというと、集団の中にいろんな人がいれば自然に多様な見方ができるんだみたいな話になっているけれども、でもいくら人数がいてもみんな同じ見方をすることももあるわけです。そういう人が来たときに怖いと思って、そういう人に対してはこんなルールをつくっていきましょう、あるいはさっきの足がくさいという話だったら、みんなに迷惑をかける人に対してはこういうルールを守ってもらいましょうというやり方もあるわけです。でもそういう風にしなかった。それはどうして、できるのか。

柴川：どうしてだろうねえ。

小林：でも、みんなで話し合ったりいろんな見方の人が出てくるから、その中で、ああそういう見方もあるんだ、みたいな。うちはそうかなあ、なんか。スタッフの中でもいろんな意見があるから、いろんな見方があって、「いや私はこう思う」、「ああなるほどね」みたいな、「やってみる？じゃあそれで」、「それでだめだったらまた違うやり方でやってみる」という、うちはね。

宮崎：わからないんだけど、柴川さんのこのカナダのエピソードから見る限りでは、柴川さん個人に対する関心が（英語の）先生の側にもあったっていうことですよ。あるいは柴川さんの実践にみなさん関心を示している。英語のDVDを見せられたっていうのもあるのかもしれないけど。お互いに言語的なバリアは確かにあるんだけど、その背後に何かしら共感できるものがあるみたいだっていう直観を持っていて、それを見ないのもったいない、変な言い方だけど、見たいっていう欲求が相手側にも出てくる。ところが、その自分の見たいものを妨げている別のものの見方がある。この人は第二言語の学習者だとか、英語ができない人だっていう風に見てしまう見方が出てくると、自分が見たいものが見られなくなってしまうですよ。その葛藤みたいなものが多分支援者の側にも起きてくるんじゃないかな。自分の中で均質化したものの見方を、否定するような場面がもしかしたらあったのかもしれないという気がしますね。

柴川：そうですね。いくら関心があっても、下手な英語でしゃべられて、それをくみ取って、しかも直してくれるんですよ。すごく忍耐のいる仕事なのに、どうしてそんなに好意を持ってやってくれたんだろう、しかも全然お金もとらないで。ボランティアでやってくれた。女性の人がそうだったんですけどね。本当に、なんでだろうと思いますね、確かに。どうしてこんなにいい人なんだろうって言ったら変ですけどね。確かに、内容、話す内容に興味があって、事例とかも話すんですよ。こういう人がいて、こういうことがあったとかって。それにすごく興味を示してくれて、なぜだったんだろうと、今から考えても不思議だなと。でも、せめてもう最後のお礼にと思って、最後の夕食会に、私がお金を払って夕食を一緒にしようと思ったのに、それすらだめだめだめって、私たちがするんだって、とうとう最後の夕食会までも、彼女は全然私からお金を受け取らなかったって、そういう彼女なんですけどね。どう

してだろうって言われてみると本当にどうしてなんだろうかと思ってしまいますね。ボランティアでやってるグループのレッスンもあって、その他に個人的にもやってくださった方なんですけど。いや、本当に、どうしてかと聞かれるとどうしてだろうと。



7. 場の支援

あらためて「場」とは

宮崎：場づくりって言うことで言えば、一体どういう場なのかが問題です。心のバリアフリーという、バリアのない場って言うことですね。と、言葉で言うのは簡単なんだけど一体それは何なのかという問題です。

川田：バリアがない場、とは？

宮崎：例えば小林さんが「場をつくるのが支援者の仕事だ」と言ったけど、どういう場をつくるのが支援者の仕事なのか。

川田：そうすると、バリアのない場をつくる支援とはどういうことかっていうことですか？

宮崎：心のバリアフリーをもし解放と言っていいならば、解放的な場ってどういう場なのかという、場の質に関わる問題があると思うんです。だからむくどりの実践を理解するときに、さっきの若者

と男の子のエピソードのように、AさんとBさんとの一対一の関係、あるいは支援者と当事者との関わりってというのはエピソードとしてはわかりやすいけど、そのエピソードだけ取り出すとむくどりの全体、むくどりの実践の全体像を述べたことにはならないですよ。

多様性が保障された場だとも確かに言えるんですけど、でも今日の話だと、多様性だけに焦点を当てると、いろんな見方があるっていう話になっていきますよね。それはそれで大事な議論なんだけど、でもその多様性が保障される場とはどういう場なのかという、場のあり方の問題がワンセットで議論されないと、むくどりの特質が見えないんじゃないか。

川田：例えば、多様性が保障される場っていうのはどういう場か。そのような場を支援するっていうのはどういうことなのか。あるいはそのような場をつくるっていうことを支援するのはまたどういうことなのか。そういうことですね。やっぱりキーワードは、「場」ですか。

宮崎：流行ってますよね、「場」って。みんな意識して使っているかどうかかわからないけれど、かなり意識的に使う方もいますね。日置さん¹¹なんかは「場づくり師」と言うくらいだから、そこにこだわってるんだけど。むくどりの実践って、一言で言い難いところがありますよね。スタッフのみなさんもどういう風に表現すればいいか悩んできたということは、その深さと重さ、広さというか、があるがゆえだと思うんです。第三者が見たときも、一言で言ってしまったら一面的な表現になってしまいどうも違うという部分があって、その一言で言えない部分が「場」という言葉でふろしきのように包まれているんだろうけど、「場」って

¹¹ 日置真世さん。釧路市を拠点に活動する特定非営利活動法人地域生活支援ネットワークサロンの創始者。「場づくり」型の実践にいち早く取り組み、「場づくり師」と自称されている。子ども発達臨床研究センターの学外研究員も務めていただいている。

言ったからわかるかということそんなもんじゃないですね。だからその「場」っていう言葉自体をどんな風に組み直して、誰でもわかるように表現すればいいのかということが課題になってくる。

さっき小林さんが「協働で一緒に何か新しいものをつくり出す」と言われましたが、協働っていうと、力を合わせてみんなで頑張りたいような綺麗な話に聞こえるんですが、実際には、協働ではぶつかり合いが必ず起きますよね。お互いが表現者になって、自分のことを表現し始めると、そんなに簡単に一致なんかしないはずだから。むしろ場をつくると言ったときに大事なことは、安心してぶつかれるような状況を、場でもいいけど、まあ状況ね、それをつくらないといけないですよ。こんなこと言ったら仕返しされるとか怒られるとか、どんな風に思われるんだろうっていう風に思ったら誰も安心してしゃべれない。そこが大事なかなと思うんです。そうすると後は、みんなが表現し始めたときに、ぶつかりあって第三のものをみんなで考えていくことが初めてできる。でもそうすると、その次に、共同探求が課題になる。みんなで一緒に問いを深めていく局面です。あなたの問いを私も一緒になって考えたい。「なんでそんな風になるんだろう、自分のときはこうだったよ、私はこうだったよ」って、お互いの経験を出し合いながら、みんなで一緒になって探究する。だから、表現者から共同探究者になっていく、その条件が何か、どうしたらそうなれるのか、そこも検討課題としてあるかなあって気がしますけどね。

川田：それは難しそうだ。

小林：でも、そうなんじゃない？場って。むくドリもねっかも、みんなが一緒に、共同探求、そういう意識はないかもしれないけど、新しい何かを目指そうという風な実践っていうか、試みをみんなですてるんだと思うんだけどな。



場の中で生まれる「支援」

柴川：こないだなんか、新しい親子が、ある人がまず来てて、それからその人が誘って、三組くらいの新しい親子が来たのね。そして、そのときに、ちょうど年齢もおんなじくらいの子たち、それからその下にまた一人子どもがいるっていう、きょうだいの人が多かったんですけども。3歳児が結構その、いろんなやり取りがあって、衝突も起きたりっていうんだけど、あるお母さんが、あの子たちどうやって自分たちで解決するか見てたいよねっていう思いがあって。で、そのお母さんたちもなんか、そういう気持ちだったらしくて、喧嘩しても、親が介入しないで、そして自然と仲良くなってみたいで。それって勇気があることで、結構。自分の子どもがやったら、ごめんねって親が謝ったりとか、謝らせたりとか、やるんだけど、子どもたちの力で解決するのを見てようっていう、そういう風に、さっきの失敗してもいい、ぶつかり合って失敗してもいいってことで。それでなんか、お互いにずいぶん影響し合ってるなって思うのは、このごろ最後の、一番最後に、絵本読みっていう時間があるんですけども。子どもたちがね、結構3歳の子どもたちが多く残ってたりするんだけど、自分が読みたいんですよ。順番に、今日は僕はこの本を読むって決めてて、その次女の子がまた、今日私これを読むって決めて。やっぱりなんかね、うまいこと上手にやってる。みんな影響し合ってくるっていうかね、なんか、

そんなところ面白いなあって思って見てますけどね。

小林：私は一つ、お母さんたちの中でエピソードがあって。気になる小学生がいたんですよ。同世代の子たちとうまいかない子で、学校でも浮いてるような子がいて、ずっとねっこぼっこにいて、とっても気になっていて。私はその子がねっこに来るときは必ず家まで送って行ってたのね。普通はしないですよ、しないですけども、その子には必要だと思って送って行ってたんですけど。その子もすごくそのことを楽しみにして、二人で話して帰ったりしてた。私はでも、(ねっこぼっこのいえの中で) 違う役割をもらって、途中で現場に出れないことがあって、その子にしばらく会えないことがあったんですよ。で、しばらくぶりにひろばに行ったらその子が来てたから、あ、今日はあの子と一緒に帰ろうと思って、ひろばが終わって探したらいないんですよ。あら、もう帰ったのかなあと思って。そして見たら、参加者さんのお母さん、幼児を連れていつもの常連のお母さんが、その子と一緒に自転車を押しながら帰って行くところだったのね。あれ？と思って、かけよって、どうしたの？って言ったら、いや、いつも最近この子送ってってるんだって言ってくれて、ああそうなんだって、ちょっとおかしいなって思ったんだけど、じゃあ私も一緒に送ってかわって言って、送っていきました、その小学生を。

で、帰り際に、なんで送ってるの？って聞いたの。実はそのお母さん帰り道反対側なんですよ、おうちの方向が反対なの。わざわざなんで送ってるの？って言ったら、いや、こぼ (小林) いつもあの子のこと送ってってたよねって言って。いやあ、私ね、実はね、母子家庭で娘を育てたと。そのときにやっぱり、娘にすごくさみしい思いをさせてたなあっていうことが、ずっと後悔していたと。だけれどねっこぼっこのいえにきたらね、親の知らないところでも子どもたちのことすごく大事にしてる大人がいるんだってことがわかった。もしかしたらうちの娘も、こうやって、

学童の先生とか、学校の先生とかね、お稽古事の先生とかに、気にかけてもらって、もしかしたら過ごしたかもしれないっていう風に思えたって。

で、私そういう地域がいいなって思うから、地域で子どもを育てたいねってこぼも言ってたけど、こういうことなんだなって思って、今自分にできることをしてるんだって言うてくれたときには、本当に、なんていうのかな、スタッフの支援とかじゃなくて、その場の人たちがそれを感じて、そのお母さんは、自分一人とか、そういうことではできなかったことを、なんかいろんな人が混じって新しい何かに変えることってできるんだってうかね、なんか、私たちの思い、思いというか、一緒になんか、つくってるんだなっていう気持ちがすごくしましたね。すごくうれしかった。

宮崎：その、支援者という言葉も、もう一度、再定義しないとイケないのかな。川田さんが「支援者の当事者性」と(手元のレジュメに)書いてるけど、この場合の支援者は、俗に言うところの、ですよ。だけど、今のように、誰もが支援している。さっきのお母さんもある意味では、支援してるわけですよ。ところがそう言ってしまうと、ねっこぼっこのいえの実践の本質をきちんと表現できてないことになってしまう。だからむくどりとかねっこぼっこのいえみたいな実践とはどういうものかが明確になってきたら、支援するとはどういうことかを、今までと違う言葉で言えると思うんですよ。その場合、場づくりというのは手がかりになる言葉なんだけど、うーん。それは我々が考えないとイケないところで、発達支援学の支援っていうのは、従来と違った意味で使わないとイケないの。こういうタイプの実践を基盤にしたときに、支援論ってどういうものかってことですよ。……独り言です(笑)。私が考えなくちゃイケないなあと。

川田：結構最近ですよ、「支援」という言葉がすごく使われるようになったの。保育の世界でも、かつては指導という言い方が主流だったけど、比

較的最近になって援助とか支援という言葉がよく使われていると思います。あまりにも耳なじみの言葉になってしまっているためか、そもそも「(支援) とは何か」ということはあまり振り返らなくなってしまっているかも……。まあでも、これは宮崎先生に再定義をしていただきましょう (笑)。

多様性のアンビバレンス

宮崎：共同探求と言っても、それはやっぱり、自然発生ではないのですね。自然のままでは、今はみんなバラバラになる方向に、どんどんいってしまいう。あんたはあんた、私は私って。さっきのアイヒマンじゃないけど、私と関係ないことだっていう風にしてしまうわけですよ。それが、残念だけど、自然、今の社会の自然になってしまっているの、人間本来の自然が出てこなくなっていますよね。その人間本来の自然を取り戻すような共同探究をしようとしたら、やっぱり意識的な働きかけが必要なので、それはどういうものかということですよ。

川田：意識的な働きかけってところが、結構難しいって気がします。なんていうか、例えば、さっきのお母さんみたいなお話っていうのは、やっぱり、そのお母さんにも、結びついていく歴史があって、響き合っているんだけど、全然そういうのなんにもありませんっていう場合に、なかなか難しいですよ。だから、うーん、その意味で、多世代多様とか、多様って言うときの、「多様」って言うても意外とその、同質っていうか、均質って、先ほど宮崎先生、セルフヘルプグループって言ったけど、セルフヘルプグループだったらいいんだけど、セルフヘルプグループの中で閉じたら、結局なんか、同じことが起こっちゃうっていうか。外で起こってたことと同じことが起こってるだけで、ある程度こう、コミュニティとしてのまとまりをもちながら、でも、開いていてっていうような形を維持するというのは本当に難しいことだなあって。大学なんか全然だめかも (笑)。

宮崎：本当はその可能性が一番ある組織なんだけど、逆に、あんたはあんた、私は私ってなってしまっていて、ちょっと専門が違ったらもう、お互い干渉しない。

川田：学校っていう場所の有利なところっていうのは、常に学生とか、子どもっていう人たちが、黙ってても新しい人が入ってきて、で、一定のものを終わると出て行くっていうことで、それはあるんですよね。だからやっぱり、一定の硬直性から免れるっていうか。だからほんと、研究室とかも新しい人が入ってこないって硬直しますよね、おんなじ話ずっとして。

宮崎：さっきの図の白と黒は対極って言ったけど、この距離が大きければ大きいほど、逆に面白いですよ。協働で何かをつくり出す醍醐味って、距離の遠さに関わると思うんです。多様性というのは多分そこに関わっている。多様性と言うと、単に色々なものがあるという平板なイメージを持ちがちなんだけど、個人の経験に即すると、自分と同じなのかなと思ったら、また違う人と出会うというようなもので、そういう意味では、同じだから距離は縮まると思いきやどんどん遠くなっていく、そういう同一と差異が同時に展開する空間が、面白いのかなっていう気がするんですよね。なかなか大変なんだけど、最初はね。

小林：なんか私 (テレビ番組か何かで) 見たので、人類が生き残るためにはこの、ダイバーシティっていうか、多様性が合理的だって話が私はすごく好きで。いろんな、もうどうしようもないような、またそんなこと言うけど (笑)、いろんな個性の人たちがいて、でも、それぞれに特徴が違って、どうしようもないなと思うような人がいたとしても、あらゆる環境に耐えられるには、あらゆるなんかこう、個性を持った人たちがいるほうが、人類が生き延びれるっていうのがあって。私、あ、それって、ねっこぼこのいえでもそうだな、と思ってる。あらゆる課題があったとしても、え、こ

の人がこのときに、こんな活躍するなんて、みたいなことが、すごくよくあって。とっても合理的な話だなんて私は思う。多様な人がここにいるってことは、いろんな課題に対して対応できる、生き延びていけるっていうこと。それに関して、みんなはなんか、そんなにたくさんいろんな人がきて大変じゃない？とかって言うけど、生き延びるためにはとっても合理的なシステムだと私は思ってるんですよね。

宮崎：両方あるんですよね。多様だから自分に近い人を見つけやすいっていうのもあるし、多様だから自分もどんな風に表現したって認められる、みんな違うわけだから自分も違って構わないっていう側面です。もう一つは、多様だから、逆に、共通のものがより深く見つけられるという面です。遠いと思ってる人と実は同じだって思ったときに、自分の人間理解とか社会理解とか、あるいは自分自身に対する理解が、今までよりも深くなっていくんですよね。そういう面があるのかなっていう気がしましたけどね。多様性を維持するって、でもすごく難しいですよね。

小林：うん、そうですね。



宮崎：やっぱりすぐに、同じものがくつつき始めて、同じものだと安心してしまう。そうすると、多様性と言っても結局、硬直化してしまう。

小林：それが傲慢ですよ。私の持っているものが一番だ、みたいな。私と似ているものが一番だ、みたいなところがある傲慢さと、だけど、そうじゃない場面に出くわしたときの、あの、ショックとか、衝撃とか。

8. 尊敬と傲慢

宮崎：まとまらなくて申し訳ないけど、もう一点だけ聞きたかったことがあるんです。柴川さんがこの1年で英語がうまくならなかったら、英語の才能がなかったと思ってあきらめようと決意をしたけど、その決意をした自分は傲慢だったと（本の中で）言われていますよね。柴川さんにとって傲慢っていうのはどういうことなのか、一言聞いておきたかったのですが。

柴川：本当に思ったんですよね。カナダに行っている間に、英語習得できなかったらすっぱりあきらめようと、英語から足を洗おうと思っていただけだけど、そんな簡単に習得できるものではなくて、英語という言語は。そしてまた、英語という言語によって世界中の人とのつながりを持てる可能性があるというのがあって。パーキンス盲学校の授業を見学したとき、耳が聞こえなくて、目も見えない子どもたちに、先生方が本当に熱心に指文字を教えている姿を見て、言葉っていうものが本当にすごい力を持った大事なものだと思って、1年で習得できなければやめようなんて、そういう簡単な考え方で英語を思っていること自体が、自分が偉そうに、そんなことを言っていること自体が傲慢なんじゃないかなあって思ったんですけどね。ちょっと答えになってませんね。

宮崎：尊敬と傲慢は通じるのですね。柴川さんは傲慢をどう定義されるのかという変な言い方だけど、傲慢になるってどういうことなのか。今のお話だったら、言葉が持っている大切さ、価値というものを簡単に切り捨ててしまう、あるいは表面的にしか見ない、あるいは自分の都合でしか解

積しない。それは同時に自分が特権的な地位にあるかのような、「こういうのは価値がないんだ」、「自分から切り離してしまっていていいんだ」という振る舞いをしたときに傲慢という言葉を使われるということですかね。

柴川：そうですね。

小林：傲慢ってポイントかもしれない。人を尊敬するのと傲慢ってすごく結びついていると思う。私もめっちゃ傲慢なんだけど、だからやってるっていうのはすごくあるな。そのたびに自分の傲慢さに泣くんだけど、心が洗われる。

宮崎：みんなそうですね。

小林：傲慢っていうのは、尊敬と、すごく人の尊さっていうのを思い知らされる。むくどりホームでは、自分の傲慢さに気づかされるのかもしれない。そう、そうだ、本当にそうかもしれない。

宮崎：みんな自分というものを中心に考えるのですが、自分と他者という二項対立で考えた場合は、自分にとって価値がある人・価値がない人、価値があること・価値がないこと、自分がよくなるためには何がいいのかという判断を誰もがしますよね。だけどそうすると後から苦しくなってくる。それは多分自分というものの理解が間違っているから、つまりボタンを掛け間違っているからです。だけど、じゃあどういう風にボタンを掛けなおせばいいのかというのはそんな簡単にわからない。頭の中では、例えばいろんな人の本を読んだりすればそれはそれでわかるけど、あるいは宗教の世界でも、自分とはどういうものかという問いには答えてくれるのかもしれないけど。でもそのことと自分の日常生活でどういう風に振る舞うかというのはまた別の話ですよ。そういう難しさを抱えながら実践が展開しているのかなっていう気がしますけどね。

柴川：なんかあの、本当に今、常時来ている大人っていうんですか、壮年っていうか、人が三人位いるんですけども、その人たちが結構、子どもたちも好きなので、子どもたちに自分の塗り絵をあげたりとか、それからちょっかいかけたりとか、するんですよ。それで、スタッフもちょっと気にしてて、お母さんに、「いや〜、ああして、ちょっとちょっかいかけたりするけど、いやでない？」って聞いたたら、「いやー、ちっともいやでないよ。いろんな大人の人に関わってもらえて、いいよ」っていうことを言ってたって言うんですけどね。やっぱりその、その人たちも、結構その、出過ぎたこともするけども、また良い面もたくさんあって、ちょっかい出しながらも、子どもたちと少しずつ関わりを持つ、みたいなの。

そんなのでやっぱりいろんな人がいると、ほんとにこの人は、むくどりにはふさわしくないとか、いない人だって人は一人もいなくて、また、誰が来るかわからないっていう、ものすごいスリルですよ。どんな人も玄関入ってくるから。むくどりホームって鍵かけないんですか？って、デイケアの仕事してる人が、「えっ、どうして鍵かけないんですか？」ってよく言われるんですけども。鍵かけないで、もう入ってくるんですから、すごくスリルも満点だし、もう、最初のころ、いやあ、もしその、どんな人が来るかわからないし、例えばポットの中に、何か毒を入れてたらどうしようとか、そんなようなこと、考えた時期もありましたけども、多様性の中でお互いに、いろんな意味で影響し合うことができるっていうのは、すごくありがたいことだと思ってます。

川田：むくどりをむくどりたらしめている条件にもいろんなものがあるんでしょうけれど、なんていうんでしょう、尊敬と傲慢の矛盾を抱えたまま関わり続けるというか、どれかの価値観に決めてスッキリしてしまわないというか、そういうものがあるのかな。今日みなさんのお話をうかがっていて、そういう揺らぎへの耐性のようなものが重要なかもしれないと感じました。最近は「寛容

さ」なんて言葉もありますが、異質さを持った他者性を互いに受け入れることがとても難しい社会になっているように思います。そうした時代の困難性にむくどりホームは20年以上向き合ってきたわけですが、そこにはやはり、我々の共通課題としての「未完のムクドリ」が見え隠れして

いるように感じました。話はつきませんが、本日のところはこれでお開きにしたいと思います。

2015年11月19日および12月3日
(北海道大学・子ども発達臨床研究センター
C 302室にて)



編集後記

座談会の中で、小林さんが平仮名の「むくどり」の中から一般化した一つの条件は自分にとって重要な問いに向き合えるというところ、という話があった。原稿（の特にこの部分）を読み返していた時、ねっこぼっこのいえでのある場面を思い出した（筆者は2015年からねっこぼっこのいえでボランティアをしている）。昨年春、あるスタッフが転居の為ねっこを去ることになり、一人ずつはなむけの言葉を贈っていたときのことだ。「ねっこぼっこのいえにはほんとうのことがあると思うの」と言った人がいた。その人の言う〈ほんとうのこと〉がどういう意味だったのかは、詳しく聞いていないのでわからない。それでもその時私は、本当にそのとおりで思った。ねっこぼっこのいえには〈ほんとうのこと〉がある、うまく説明できないけれど、あると思う。編集を通して、この座談会は〈ほんとうのこと〉について語るための、実践者と研究者の共通の、新しい言葉をつくる営みだったように感じた。

振返ってみれば私自身も、子どものころから漠然と感じていた、人が生きていくうえで大事なこと、自分にとって〈ほんとう〉だと感じることを、その説明できないことを言葉にしたいと、研究すると決めたのだった。研究者の研究に対するスタンスは様々だが、少なくとも私の場合は柴川さんや小林さんと同じように（お二人のようににはできていないけれど）、自分にとって重要で切実な問いに、研究を通して向き合おうとしているのだと改めて気が付いた（だから苦しいのか）。その意味では、私の研究は実践のようだ。研究という自分の現場で、自分にとっての〈ほんとうのこと〉を探り、他者に伝えるための言葉を、私もつくっていききたい。

（竹森未知）